

関東大学リーグの男子フェンシング部の運営に関する研究

Research on management of boy s fencing club of university league in Kanto

1K06B046

指導教員 主査 間野義之先生

大澤 三洋

副査 武藤泰明先生

1、研究背景

2008年の北京オリンピックのフェンシング競技の男子フルーレは太田選手が銀メダルを獲得し、一気に国内における認知度が高まった。しかし、フェンシング競技において、大学卒業後の企業の受け皿は未だに少ないのが現実だ。2008年の4月に飲食・娯楽施設のネクサスが日本フェンシング界初となるプロチームを設立させたが、それ以外にフェンシングを本業で行うとすれば警視庁に入るか教師として生徒を指導しながら競技を継続していくしかない。このような現状の中であっても、ロンドンオリンピックでさらにメダルを獲得するためには国内での全体的な競技レベルの向上が必要であると思われる。2009年にオリンピックでメダルを目指すユース層を育成することを目的としたプログラムであるエリートアカデミー事業にフェンシングが加わったことによりジュニアの育成は多少強化されているが、それでも即戦力として現時点で必要とされているのは最も国内レベルの高い選手が集まる大学スポーツの選手である。関東大学リーグの男子フルーレチームを多角的視点から比較し、各チームに何が不足し何が秀でているかを詳しく探ることで将来的に大学スポーツの全体の競技レベルが向上することを期待して研究をしていきたい。

2、研究目的

国内で最もレベルの高い選手達が集まる関東大学リーグのフェンシング部の男子フルーレチームを多角的視点から比較し、各部の具体的な

運営の課題を明らかにすることを目的とする。

3、研究方法

関東の大学の一部リーグの中のAクラスである法政大学、日本大学、早稲田大学の男子フルーレチームを比較する。特に、コーチの有無、人材の確保、資金面の3つの運営環境を中心に比較、考察していく。

4 結果

コーチの有無に関しては法政大学にナショナルチームフルーレコーチ兼任のコーチが存在し、練習を運営していたが、早稲田大学と日本大学ではコーチが練習を運営していなかった。具体的なコーチの有無のメリットでは、特にレッスン時間の短縮による練習効率の上昇が表れた。

人材の確保において、法政大学は法政中学、法政第二高等学校における一貫した教育がなされ、ジュニアの育成という面で成功を収めていた。また、それらの付属校とスポーツ推薦により、定期的に競技レベルの高い選手を獲得していた。早稲田大学でも付属校が存在し、付属校出身者とスポーツ推薦により人材を確保していた。日本大学では付属校にフェンシング部が存在しないので、スポーツ推薦のみで人材を獲得していた。

金銭面では日本大学が最もOB会費の補助が強く、補助金を海外遠征負担金に回していた。早稲田大学でも寸志として若干の海外遠征費用の負担があったが、日本大学ほどの補助はなかった。法政大学は各チームを比較し、最も補助

金が少なかった。

5 考察、結論

国内競技力が最も高い法政大学は、さらに金銭面を強化することで国際競技力を強化できると推測される。また、次に国内競技力が高い早稲田大学はジュニアの育成を強化することでコーチの増員と金銭面の強化の可能性が推測される。一方で、平均して国内競技力が高いわけではないが、個人能力で国際競技力が大学生のなかで最も高いとされる選手を有する日本大学では、国際競技力の高い選手を育成しているという実績から、平均して国内競技力が高い選手を他にも確保することができれば、全体的に国際競技力が高いチームを作ることができる可能性が最も高いと考えられる。